

## 7

## 頼春風と頼家

松岡 尚則<sup>1,2)</sup>，田中耕一郎<sup>2)</sup>，別府 正志<sup>3)</sup>，並木 隆雄<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> 公益財団法人研医学会，<sup>2)</sup> 東邦大学，<sup>3)</sup> 東京医科歯科大学，<sup>4)</sup> 千葉大学

## 【緒言】

頼山陽史跡資料館にて平成28年10月14日～12月4日特別展「頼家と広島医学」を開催するにあたり、頼春風の資料をみる機会を得た。頼春風は、頼山陽の叔父にあたる人物で医師であった人物である。

## 【方法】

広島頼家伝来資料（杉ノ木資料）、竹原春風館伝来の医学関係資料、および、これまで発表された頼家、頼春風に関連する論文、資料を利用し、頼春風の医学、頼春風に関わる当時の状況について考察を行った。

## 【結果】

頼山陽の親族には多くの医療関係者がみられる。母の静（梅颯）は、儒医 飯岡義斎の娘であり、頼山陽の叔父の頼春風は医師であった。また、母の妹の直（梅月）は尾藤二洲に嫁いたが、尾藤二洲は儒医 宇田川楊軒、合田求吾に学んでいる。

頼春風は古林立菴に学んだ。頼春風が学んだ古林見宜の塾は、古林見宜（1579-1657）の門の塾であった。古林見宜は『医学入門』を積極的に日本に紹介した人物である。1709年岡本一抱『医学入門診解』には、見宜堂5代の古林正禎が序を寄せている。

頼春風の師 古林立菴について尾藤二洲は『中庸首章図解』で「古林立菴は見宜の族なり。常に素難を講じ、津津已まず。人以て迂緩と為なす。余と志尹と皆交はり善し。志尹の塾生久しく病み、百方効無し。一日立菴に過り、談病生に及ぶ。立菴曰く、「先生を訪ふ毎に、吾その言貌を見る。蓋し風邪未だ除かざるのみ。憂ふるに足らざるなり」と。その説五行を引抛し、冗長厭ふべし。翌日来診して曰く。「果して吾の測る所の如し」と。乃ち薬を与ふ。五七日にして愈ゆ。志尹余に謂つて曰く。「彼の素難の学も亦た廃すべからざるなり」と。」と記していた。当時、医学の中心は後世派から古方派に変わりつつあった。古方および蘭学を修めた尾藤二洲ははっきりとは述べないものの、五行説を用いた冗長な厭（嫌になる）の説だと考えていた。

頼春風の医学は、後世派であったと考えられる。頼春風が所蔵の書に、小刻『傷寒論』香川修徳序正徳五年（1715）序、『金匱要略』寛保三年（1743）がみられた。また、頼家には吉益東洞『薬徴』『類聚方』、吉益東洞校閲、六角重任筆記『古方便覧』がみられた。後世派に属する春風であったが『傷寒論』の知識は得ようとしたと考えられた。

頼春風『妙方拔萃』という書も伝わっていた。『妙方拔萃』には「嘔噎 古林七十方ノ内奇方」とある。この処方頼春風の師である古林見宜の塾の処方と考えられる。『妙方拔萃』小児喘痰に「春閣所授熊吉」「半夏瀉心湯加鷓鴣菜 大黃 以上ニ味」と記載がみられた。藤原春閣は（東広島三永）在住の医師で頼春風と交流があった。鷓鴣菜を使用していることから、松原一閑斎の流れを汲むことがわかる。恐らく、熊吉の病態は寄生虫疾患を併発した呼吸器疾患であったであろう。

篠崎三島が頼三兄弟を評して「春水は四角、春風は円く、杏坪は三角だ」としている。頼春風の顔も性格も兄弟の中で最も円かったといわれる。頼春風は旅を好みしばしば各地に出かけた。安永七年（1778）父享翁・兄春水らと吉野に旅し、『芳山小記』を著した。文化三年（1806）西条東村から吉田、出雲を旅し、『雲行日記』を著した。吉田から三次までの舟で、吉田の祇園社の祠官から二宮東亭（桃亭）の尊をきいている。文化四年（1807）北九州一周で長崎まで旅し、『適肥』を著した。文化八年（1811）に江戸、文政八年（1825）に京都を旅している。

## 【総括】

頼春風の医学は後世派であったと考えられるが、『傷寒論』『金匱要略』を学ぶなど医学の変革期であった時代、最新の医学情報を得ようとしていたと考えられた。また、困難な症例に当たった時は、他の流派に受診させるなど、寛容な対応をしていたと考えられた。